

自給的農業の変容

——島の農業の商品生産へのあしどり——

野 木 稔 郎

はじめに

島の農業、とくに島が集中する九州西辺の島の農業は古くからの伝統的、自給的農業の色彩が色濃くまつわりついているといわれてきた。しかし今日、我国の農業はすべて商品、貨幣経済の舞台にのせられ、「営農」も好むと好まざるとにかかわらず、商業的農業、商品生産農業への途をあゆまねばならない。商業的農業とは農家が自家の消費のためではなく、販売するために行なう農業、即ち商品生産農業であるとするのが通常であろう。今日、日本の農業は、その多くは、生産する農・畜産物を直接あるいは間接に販売する、あるいは少なくとも販売に振向けようとする農業であるといつて差支えないであろう。

島の農業、ことに“おくれた”，自給的性格が強いといわれてきた九州西辺の外海にうかぶ離島の農業も、きわめて近年のことではあるが、今日、明白に商品生産にふみ出している。しかし、もちろん島の農家には生産する農産物あるいは畜産物のきわめて僅かな部分しか販売にふりむけない農家、さらに全く販売しない農家が数多くある。このような農家は商業的農業、商品生産農業が一般的な今日の日本の農業にも少なからずみうけられることはいうまでもない。きわめて僅少の生産物の販売にせよ、商品化ではあるが、今日、商業的農業、商品生産農業をいとなむというにふさわしい農家はその生産物の極めて多くの部分を、中心部分を商品化する経営をおこなう農家であろう。島にとくに多い、商品化が全くない、あるいは極めて僅かな販売しかない農家は、ここでは自給的農家となろう。しかしこれは自然経済、現物経済を基調としていた時期の僅かな農畜産物を商品化していた農家とは明ら

かに異なっている。

農産物の商品化は、藩政期にも、とくに幕末頃になると米穀を始め、藍玉、紅花、棉花、菜種、生糸等々の商品作物といわれる作目について領主的商品化がさかんになるが、これが主要な形態としても上層農を中心として「剰余」部分を通じての農民的商品生産、そしてさ、やかな農民の商品化もひろくおこなわれるようになっていく。しかし自給自足を強制され、自然、現物経済が基調となっていた藩政期のさ、やかな商品化と、資本主義経済が深く侵透している今日の、農外よりの収入を補う、生産物の小さな商品化とでは、農業生産におけるその性格は異なっており、そしてまたその自給農産物部分の農家生活にもつ意味も異なっている。とはいえ、しかしそれは自給生産であり、その農業生産にも自給的性格がまつわりつきがちであることもいうまでもない。とくに島には通勤形態の雇傭その他、地元での兼業による貨幣収入の機会が乏しく、永年、粗放な作目の生産にしたしんできた島の農業の技術は低く、そして非合理的な流通機構の根強さなどがみられるなかで島の農業の自給的性格は強く残されがちである。

島の農業の自給的性格の強さは、いうまでもなく、生産物を全く販売しない農家、あるいはきわめて零細な商品化しかおこなわない農家のみによって示されるものではない。今日、なおも自給的色彩をまといつつも、商品生産の途をあゆんでいる島の農家経営にしても、つい近年まで、いわゆる「高度成長」期に至るまで、色濃く残されていた自給的雰囲気、自給的構造の中から漸く最近に至ってより明確に打ち出されてきたものである。島の農業が商業的農業、商品生産農業の途へふみ出し、あゆみ続けるのは容易ではなかった。今日の商品生産農業を生み出すにいたる迄の、そして、「高度経済成長」の波に洗われる以前の島の農業の様相を西九州、長崎県の離島、対馬、五島列島、小値賀島、宇久島および壱岐島をとり、検討して行くことにしたい。

1. 島における商業、貨幣経済と農業

—藩政期以後の対馬農業のあしどり—

九州本土と韓国とにはさまれ、本土よりはむしろ韓国に近い対馬は波あら

い外海に孤立する国境の島であり、離島としてのあらゆる性格を強くかねそなえた大型の山島である。平坦地、耕地に乏しく、藩政期には一時“無高”ともされていた地域であるが“10万石の格式”を与えられた対馬藩の財政を支えた重要な柱は“高4万石”といわれた朝鮮貿易であった。この朝鮮貿易¹⁾についてはもっぱら対馬藩がとりしきり、しかも「抜目のない商人」のように振舞い、活発な商業活動を展開した。しかしこの対馬の最大の島外との“商業”には対馬の農民のかかわりはきわめて小さかった。

即ち、朝鮮貿易は対馬藩による専管貿易であり、その取扱いは藩士あるいは特権を与えられたきわめて一部の商人によってとりおこなわれ、厳重な藩の統制のもとに、抜け荷、沖買いはかたく禁止され、また朝鮮向けの主要な積荷、銅、銀、工芸品等の多くは本土から集められ、島内の産物は殆んどなく、島の商人との、とくに農民とのこの“商業、貿易”とのかかわりはきわめて少なかったのである。なお、朝鮮貿易の見返りとしてもたらされる積荷が対馬藩の財政を支えるのであるが、そのうちでもとくに重要な見返り物資は人參、米であり、人參は本土に売りさばかれて必要な物資を手に入れ、米はいうまでもなく米の産出のきわめて少ない対馬藩、島民の生活を支える重要な柱であった。²⁾

また朝鮮貿易の場合と同様に本土へ移出されるきわめて僅かな島の産物の取扱い、また島内の商品流通についても藩はきびしく取締り、島民の貨幣、商品経済との接觸は強く規制され、農民と商品経済とのふれあいはきわめて小さかった。

もともと「山岳重疊」、耕地に乏しく「一島の産穀島民を養ふに足らず」というにふさわしい対馬は、さらに島であることから、藩によって「一旦海路梗塞の場合において民食補充の為に栗樹、櫛樹の繁殖が奨励」されてきた食糧の乏しい孤島であり、このような対馬からの島外への食糧農産物の出荷は殆んど不可能であった。島外に移出される対馬の産物としては豊かな林産物が藩の倭館がおかれている朝鮮の釜山の居留民に、あるいは築前、肥前にあった対馬藩の飛地に移出される、あるいは海産物が御免銀、出運上を賦課された上で、きびしい藩の取締りのもとに僅かに移出されるのがめだつのみで

あった。³⁾しかしこの島外移出は、木材の場合であるが、「木材島外輸出は運輸の便なきと又収支の利多からず」⁴⁾とされる困難な交易であり、移出されるのは農産物ではなくイカ・ブリ等の水産物、薪、木材、椎茸、木炭等の林産物が主要なものであるが、農民は直接にはその生産にたずさわるにしても、農業、農民と商品、貨幣経済とのふれあいはきわめて稀薄であったのである。

また、対馬藩は島民の他国、とくに上方への進出にきびしい規制をもうけるとともに、他国外来商人の来入、滞留にも厳重な枠を設け、藩外への商品の流出はきびしく取締っていたが、藩内の商業にもきびしい規制を加え、とくに在方への商工の進入を固く阻止し、町方には幾分なりとも商業の進展ははかられたものの、在方の商工は極力制限され、商品、貨幣経済の農村への浸潤は防圧されていた。

由来、対馬藩は中世的な藩士土着の社会体制を有し、兵農分離以前のものが近世にも残存し、また被官、名子のような隷農体制が普く存在し、土地制度としては「地分け」的な慣行を有し、木庭作の焼畑耕作が行われ、土地の丈量には蒔称が用いられるなど総べての方面においてプリミチブな形態を有し、このような後退的、停滞的な対馬の農村社会、土地制度にもかかわらず、対馬藩の朝鮮貿易にみられるように割合に早くから商品、貨幣経済的な側面の跋行的な先進性がうかがわれるが、しかし、これは自然経済的な田舎社会の後退性を否定し去る程のものではなく、農村社会への商品経済の浸潤は防止されたのである。⁵⁾

対馬では最大の“商業”である朝鮮貿易はいうまでもなく、その他の島外への商業もきびしく規制され、島内の商品経済についても、幕藩体制期の農政の基調である農民層の商業および都市との接觸を極力防止しようとする政策は、対馬が隔絶された波荒い外海におかれた孤島であることと相まって、きわめてきびしくつらぬかれ、対馬の農業には商業的農業の芽生えは殆んどみられなかった。

明治4年の廃藩置県後、商品、貨幣経済に対する藩の規制はなくなったが、交易、商業のきわめて困難な事情は殆んど変ることなく、そして、農産物の島外移出が殆んどみられなかったことはいうまでもない。⁶⁾交通、運輸手段も

除々にとゝのえられ、明治16年には博多との間に汽船の就航をみるものの、遠い孤島から波荒い外海を渡っての本土との往来は困難をきわめた。それにしても水産物、林産物の島外、本土への出荷、また本土からの物資、資本の流入も増加し、商品、貨幣経済に入りこんで行くにせよ、何よりも耕地は乏しく、食糧の自給が全く不可能な対馬では養蚕等が僅かに自給的におこなわれていたが、農耕は殆んど食用農産物、主食、主食代替作物の生産に終始し、この自家食料生産の自給的農業の基調は明治、大正、昭和と固く維持され、島内では僅かの野菜などが商品化されるにせよ、島外への農産物のお荷は殆んどみることが出来なかったのである。しかし貨幣経済の侵透とともに大正、昭和期へと次第に向上してくる食生活、生活水準の向上にともなう生活資材および僅かながら購入される肥料等の生産資材の支払は農家のたずさわる兼業としての林業（とくに生産される木炭の対州馬による運搬あるいは木材の伐採、搬出等への従事、また製炭原木、坑木等への立木売却等）、または漁業による水産物の島外、本土等への販売、その他大工あるいは鉱山等への就労による賃金収入、出稼ぎ等による送金等によりまかなわれた。⁸⁾

食糧を始めとする生活、生産資材の本土依存は漸次、増大して行き、対馬にも商品、貨幣経済は確実に侵透して行くが、昭和期に入っても島内の一部の地区に切干甘しょ等の僅かの農産物の商品化はみられはするが、対馬の農家の作付の基調は殆んど変ることなく、対馬の農業の自給的性格は已然として強く維持されていた。⁹⁾

戦前の対馬農業の姿態は大きく変ることなく戦後に持越された。敗戦まもない昭和25年の対馬の農業に¹⁰⁾あたえられた耕地は、島面積の僅かに3.7%、うち水田はその25.5%に過ぎず、さらに農家の耕作規模はきわめて零細であり、5反未満層がほぼ半数をしめるが、このような零細農家によって畑地が多く、傾斜地の多い、きわめて狭少、零細な耕地のうえに対馬の農業はいとなまれていた。耕作には、青壮年男子はせいぜい農繁期に従事する程度であり、農作業はもっぱら婦人、老人の手に委ねられ、生産力はきわめて低く、主要な作物である甘しょ、麦、米についても収量は長崎県平均にくらべてもその6割ないし8割程度に過ぎず、その他の作目としては大豆、野菜類等があるが、

これら伝来的な自給的食糧作物は島の農家の食糧をまかなうにもほど遠く、博多までの定期（貨客）船の往来は1日1回という、交通運輸手段もまだきわめて不備であったこの時期の農産物の「商品化」とは、供出の対象となった米で生産の10.6%、麦で9.3%に過ぎず、“自由販売”を含めても20%程度と推定され、食糧不足期のきびしい統制のしかれていた時期であったが「商品化」はきわめて僅かであった。農家の兼業は87%（一種兼56%、二種兼31%）におよび、主要な兼業は林業、林業賃労働（対州馬による木炭運搬も）、あるいは漁業であり、そこからもたらされる年間4～5万円程度にすぎない貨幣が現金総収入の7～8割に相当する農家が少なくないという状況であった。即ち、この時期の対馬の農業は、劣悪な耕地、それも木庭、切替畑、山畑の多い畑地、そして僅かな水田という構成に林野の自給野草により飼育可能な対州馬、対州牛を唯一の生産手段として組みあわせ、主として婦人、老人の手による生産性のきわめて低い自給的農業であり、主に男子は林業、漁業、その他賃労働等の兼業に従事するというのが支配的形態であった。

きわめて劣悪な生産、市場条件しかもちえなかった対馬の農業の自給的性格は、その後もながく維持され、戦後の日本農業を大きく変えていく「高度成長」期に至るまできわめて濃厚に残される。対馬にも「高度成長」の余波が漸くおよんできたと思われる昭和35年の世界農林業センサスによるほかはないが、対馬の農家のうち、全く農産物の販売のない農家が52.3%、販売があっても生産資材の購入費を漸く償うのではないかとされる2万円以下の販売額しかない農家が22.1%、計74.4%にのぼり、これに反し30万円以上の販売がある農家は僅か0.3%しかない。そしてこの時期にも、その販売額には「特殊林産物」としてあつかわれることもある椎茸が若干、含まれている。

椎茸はこの時期以後、人工栽培が急速にひろまり、対馬の最も主要な生産物となって行くのであるが、しかしこれはいわば林業生産の延長線上にあるものともいえよう。対馬も、除々に商品経済、貨幣経済の波にひきこまれていくが、これにたいする対馬の対応はその豊かな水産資源、林産資源、即ち自然条件の有利性の上になつて、その水産物、林産物を販売することによってであり、僅かに食糧を補給するに過ぎない農業生産、農産物からの商品生

産の展開はついにみられず、自給的色彩の強い農業にとどまることになる。

対馬に商業的農業の展開が殆んどみられなかったのは、このような遠隔の僻地のみじめなまでに耕地の乏しい地域では、この時期、あえて異とするに足りないであろうが、島内の道路も全く不備、というよりはつい近年まで集落から集落への交通も小船に依存せざるをえない地域も少なからずみうけられたような島内交通もきわめて不便であった対馬は、明治以降も島内にも市場条件を欠きつづけてきたという事情もあずかっていることもあったといえよう。きわめて乏しい耕地、きわめて低い農業の生産力は対馬の本戸制度¹⁾による土地制度を長くつたえ、存続させたが農地を全く、あるいは殆んどもたえない入寄留層、分家寄留層が主として商業、商業的な漁業にたずさわり、農地、林地を確保した本戸層の農民、給人系はその農地、山林にとじこもり、資源の売却、とくに立木販売に依存してきたきらいがみられ、農業での商品生産、商業的農業にふみ出そうとする姿勢は殆んどみられず、自給的色彩のきわめて強い農業をながく維持することになったといえよう。

注1) 宮本又次「対馬藩の商業と生産方」「九州文化史研究所紀要」第一号、九州大学九州文化史研究所、昭和26年3月、11ページ。

2) 藩政期の朝鮮との“貿易”は対馬藩の朝鮮方と釜山におかれた藩の和館との間に行われ、進物、公貿易、私貿易の別があった。進物とは対馬からの進物、公貿易は朝鮮から対馬に対し朝貢したもので、貿易というものの献上、礼物であり、実質的には歳幣、そして返礼といえよう。私貿易は糸、段物、人参等の交易をする通常の取引であるが、いずれも藩によってとりしきられ、「輸入された商品」は大阪に運ばれ、市中の唐薬問屋、米綿問屋等に運ばれた。なお人参は対馬藩の専賣品であり、將軍家、諸家への贈答品にもつかわれた。「輸入品」としてはその他特産品等があるがとくに重要であるのは米であった。一方、対馬から送られるのは銅、胡椒、明礬、銀、硫黄、工芸品その他であるが、これらのうち、銀の一部などの産出はあったが殆んど本土、とくに大阪、博多、江戸、長崎を通じて他国、本土各地、あるいは海外の産品をも仕入れたのである。対馬教育会篇「対馬島誌」昭和3年7月、305ページ～308ページおよび新対馬島誌編集委員会「新対馬島誌」1964年4月、29ページ、408ページをみられたい。

- 3) 4) 前出「対馬島誌」257ページ, 262ページ~263ページ。「新対馬島誌」401ページ。
- 5) 前出, 宮本又次「対馬藩の商業と生産方」11ページ。なお, 宮本又次「対馬村落の身分構成」『経済学研究』16巻2号, 同「対馬村落の土地制度と貢租」『経済学研究』16巻3号, 参照。
- 6) 明治に入っても「長崎県統計書」にあらわれる対馬の島外に移出される農産物としては大豆等が僅かにみられるぐらいであるが明治末, 42年, 43年の島外へ移出される対馬の産品としてあげられているのは木材, 薪, 木炭, 椎茸等の林産物および鰯その他の海産物であり, 農産物は姿をみせていない。九大林政学教室「北九州林業実態調査報告書四—対馬の林業構造」昭和28年, 87ページ, なお前出「新対馬島誌」参照。
- 7) 水田のきわめて少ない対馬では, 畑作物としては麦類とくに大麦が明治期を通じてその大半をしめ, 甘しょがこれに続き, その他大豆, 粟, そば等であるが(長崎県「長崎県史」近代篇「普通畑作農業の展開」参照)耕地が乏しい対馬では木庭作, 切替畑も已然として長く残されており, 大正も後期の9年~12年の平均作付を面積順にあげてみれば麦類2,427町, 甘しょ1,237町, 稲598町, 蕎麦374町, 粟174町, あるいは大根128町, 大・小豆等豆類その他152町というように殆んど大部分が主食用の自給作物であり, その他としては僅かな桑の植栽, 12.7町が目だつ程度である(各年次「長崎県統計書」)。また, 養蚕は古くからおこなわれていたものであるが, 明治以降, その普及がはかられたものの, その展開は容易ではなかった。それでも昭和初期に至ると僅かにひろまり, 桑栽培面積56.5町, 栽培戸数695戸, 繭生産量821貫を数えた(昭和5年「長崎県統計書」)。
- 8) 農家がたずさわる兼業としての林業, とくに製炭業あるいは漁業および島内, 厳原町等にある本土資本の亜鉛鉱山の雇傭についてはさしあたり拙稿「対馬の農林業の問題」『長崎大学調査団「対馬の経済と社会」長崎県, 1965年』所収および「木炭の生産, 流通機構と農協」『「経済論双」9の5, 昭和37年』所収の対馬の部および前出「北九州林業実態調査報告書四—対馬の林業構造」の佐須村および琴村の項をみられたい。
- 9) 昭和初期の作付も大正期と殆んど変らない。昭和5年の「長崎県統計書」により, 作付面積の大きい順に列挙すると麦類2,321.3町, 甘しょ1,167.2町(切干甘しょ13,045貫), 稲639.6町, 蕎麦232.9町, 大豆186.6町, 粟113.6町, 小豆51.8町, その他野菜,

花卉324.6町（うち大根103.8町）が主要なものである。即ち殆んどが粗放な、自家食糧としての自給作物である。

10) 対馬の昭和25年の農業については前出「北九州林業実態調査報告書（四）—対馬の林業構造」によるところが多い。

11) 本戸制度についてはとりあえず河地貫一「離島地理学」1967年、403ページ～415ページを参照されたい。

2. 商品生産へのあゆみ

「高度成長」期へむけての五島、小値賀、

宇久、壱岐農業の商品生産への歩み

A 五島列島

対馬から南に下って、東支那海に向ってひろがる長崎県の西の海には、壱岐島、平戸諸島、五島列島等々、有人、無人、数百のおびただしい島々が展開している。これらのうち常住人口をもつ島も、壱岐、福江島（五島列島）など若干の島々を除いて、多くはきわめて耕地の乏しい島である。なかでも五島列島の上五島地区の島々、中通島、若松島、日の島、また奈留島等の島々は対馬と同じように、山島的地形の島であり、きわめて耕地に乏しく、島の人々の多くは漁業に依存して生活するいわば漁業の島である。これに対し、下五島、とくにその主島、福江島は水田こそ少ないが広い畑地がひろがる、漁業よりは農業に大きく依存する大型の農業の島である。

自給的性格の強い島の農業も、好むと好まざるとにかかわらず、商業的農業、商品生産農業への途を辿らねばならなかった。今日、商品生産農業の展開には、とくに島内に市場をもたない島では、本土への出荷、輸送のために一定規模の出荷量をまとめることが重要であり、そのためには一定規模の栽培、飼養が、したがって一定規模の生産基盤が、ある程度の農地が必要となろう。下五島、福江島は広い畑地とともにそれなりの規模の農家数を持ち、本土への交通運輸条件も対馬、その他の小規模離島の多くにくらべればまだ恵まれた島である。

まず、下五島、福江島からみていくが、この島の農業も、明治、大正、昭

時と時の流れとともに次第に商業、貨幣経済の波にまきこまれ、主として自家食糧、主食として栽培されてきた主作物の甘しょ（切干し）の本土への出荷も除々に増加し、養蚕も商業的農業の動きをみせ、換金作物としての葉たばこ等の栽培も展開し、また島外へ出荷されて現金収入をもたらす仔牛生産も進展をみせる等、農産物の商品化、島外、本土へむけての商品生産としての農業も戦後にむけて次第に進展してきていた。¹⁾とはいえ、五島、福江島の作付の殆んど大部分は伝来的な粗放な自給的な食用作物の作付であり、これらの農産物の商品化は行なわれてはいたが、福江島の農業は未だきわめて自給的性格の強い農業の様相をみせていたということが出来よう。

福江島の西の端に東支那海にむけて広い畑地のひろがる、下五島農業の「原型」をもっともよく伝えるといわれる三井楽町がある。戦前、昭和の初めから戦後まもなくの三井楽町の農業についてその作付の推移をあげると粗放な自給的作目がその殆んどをしめている（表1）。これらの主要な作付以外の零細な作付としては、三井楽町役場の資料には蚕豆、とうもろこし、ごま、そば、だいこん、にんじん、ごぼう、さといも、きゅうり、とまと、なす、すいか、ねぎ、たまねぎ、かんらん、はくさい等々の種々の野菜、その他緑肥作物、また、なし、かき、みかん、もも、びわ、うめ、ぶどうなどの果実があげられている。しかし、これらはいずれもいうまでもなく農家の自家用と

（表1）三井楽町の主要な作付の推移（昭和5年～昭和25年）（単位、町）

年次別 作目別	甘しょ	裸麦	小麦	大豆	水稻	陸稻	桑	陸奥 繭	粟	黍	馬鈴薯	小豆	南瓜	菜種	雑穀
昭和5年	721.1	498.8	123.0	531.0	30.5	6.0	21.3	—	8.4	20.9	16.0	5.3	6.5	2.4	—
昭和15年	755.0	623.0	69.6	570.0	51.2	7.0	11.0	2.5	7.5	1.2	15.0	11.5	8.0	2.0	—
昭和25年	950.0	675.2	95.4	533.0	62.3	8.7	0.5	—	0.5	—	18.2	1.3	8.5	3.9	1.2

※ 三井楽町役場資料による。

して栽培されていたものである。いずれにせよ、三井楽町の作付の大部分は甘しょ、小麦、大豆であり、それに僅かな面積の水稻、陸稻の作付があるが、いずれにせよ三井楽町の作付の大部分は在来の食用の自給的な、粗放な作目によってしめられていたといえる。しかし（表1）によっても気づかれるように、まず、この時期の動きとして水稻の作付が大はばに増大していること、

麦類にたいして切干しとして出荷しうる甘しょの作付がより大きく増加し、そしてさすがに、自家食糧であった粟、黍の作付が消滅しようとしていること、即ち、商業的農業が伸びてくるなかで自給食糧としての麦、また雑穀の作付を減少させ、代って商品としての役割をもつ作物、甘しょ、同じく自給食糧の役割をふくめて島のもっとも渴仰する水稻の作付が大はばに増大したことがみられる。また桑の栽培がいちじるしく衰退し、消滅しようとしていること、また普及するかにみえた除虫菊がこの時期には全く姿を消していること、また表1には示していないが衰退した桑園に代るよう²⁾に換金作物として一度は消滅した葉たばこが再度導入され、栽培面積を急速に拡大して行くのもこの時期であった。³⁾その他、古くから農家に現金収入をもたらしてきた役牛としての和牛仔牛の生産があり、その辺境的商品生産形態も後にみるようにこの頃から役肉用牛の生産へと歩き出そうとしていた。このような作付形態がこの時期の福江島のおゝよその農業の様相を示すものであるが、自給的性格を強くたもつといわれながら島の農業も商品、貨幣経済の波にあらわれては商品作物を導入、普及させようと試みてはきた。しかしその商品生産農業の展開はきわめて困難であった。

福江島三井楽の場合にみた除虫菊、葉たばこと同様に島からの出荷輸送に好都合な商品作物である五島の繭も一養蚕は輸出に大きく依存する商品生産であったという事情もあるが一同様な運命を辿った。もともと五島でも養蚕は古くから在来種の飼育がおこなわれ、自家用にあてられていたが、商品化されるようになって、とくに大正初期に桑の改良増殖がおこなわれ、桑園面積、収繭高も大はばに増加し（表

(表2) 五島の養蚕の推移(明治44年~昭和5年)

	飼養戸数	桑園面積	収 繭 高
明治44年	2,043戸	8.99町	480石
大正12年	2,176	131.9	*1,138貫
昭和5年	3,251	318.8	45,780貫

※ 長崎県統計書による。

2), 大正末期、商品生産に至ったことをうかがわせるが、この頃、養蚕組合による共同飼育もおこなわれるようになり、大正末から昭和初期にかけて展開し、五島の農

家に現金収入をもたらしてきた。しかし大平洋戦争とともに衰退し、戦後には殆んど消滅してしまうのである。また三井楽町の場合にみたように姿を消

してしまった除虫菊、葉たばこについても、除虫菊のように輸入その他の原料におされて価格の低迷がもたらされたなどの理由もあるが、自給的、伝来的な、粗放作物の生産に甘んじ、馴れしたしんできた五島の農民には栽培技術がともなわず、導入された商品作物の栽培も程なく中止され、杜絶えてしまうのは珍らしいことではなかった。

しかし、戦後も時の経過とともに下五島の農業も僅かながらその様相を変えることになる。戦後の窮迫した食糧事情が落ち着きをみせてきた昭和31年の三井楽町の作付は、町役場の資料によると、その耕地、1,417.7町の95%をしめる畑地の作付で、もっとも大きいのはまず甘しょ（789.5町）であり、ついで裸麦・小麦（645.9町）、大豆（393町）、菜種（65.6町）葉たばこ（61.3町）とならび、僅かな水稲および陸稲（63町）と続くが、さきの昭和25年にくらべて作付の動きでめだつのは大豆が減少し、葉たばこの大幅な増加が目をはくのみであり、大きな変動はみられない。ただし、もっとも作付の大きい主作物の麦、甘しょは昭和25年にくらべて作付面積は若干減少している。しかし、これらの主作物、とくに甘しょの生産高はこの時期にかけて飛躍的に増加しているのは、甘しょの単位面積あたりの収量が大はばに増大しているからであり、一方、投下労働は減少し、きわめて生産性の高い甘しょ作がおこなわれるようになって⁴⁾いる。三井楽町の農家に現金収入をもたらす作目には甘しょの他に麦と葉たばこ、あるいは大豆、そして仔牛があったが甘しょがもっとも大きく、農家にもたらされる現金収入のおよそは大量に市場に出荷され、きわめて生産性の高い商品作物となっている甘しょによるものであり、「高度成長」の波及を前に貨幣経済に深くひきこまれようとしている三井楽町の農家の生活を支える最も重要な商品作目であった⁵⁾。

もともと、甘しょは周知のように風潮害等の自然災害に強く、水の乏しい離島の自然条件、土地条件にかなった作目であり、古来、生で、あるいは乾燥されて、水田の少ない五島では近年まで麦とともに主食として島の農民の生命を支えてきた作物である。それが島外、本土に出荷され、澱粉原料、アルコール原料等の工業原料として商品化されて行くが、とくに戦後は甘味資源対策の一環として価格支持政策の対象としてあつかわれるが、甘しょは澱

粉、切干しに加工された場合、離島、五島からの出荷でも輸送上の不利はきわめて少なく、本土地域からの出荷と殆んど同じ条件であり、購入肥料等の生産資材の輸送運賃、また本土へのお荷輸送運賃についても県経済連の取扱い、プール計算により本土地区と殆んど同じ条件であり、離島から本土地区に向けて出荷される農産物としてはきわめて好都合な農産物であった。生産性も、戦後とくに、商品化の進展とともに大はばに高められた甘しょは五島では本土の米にあたる農産物であり、五島の農産物を代表する最大の農産物商品となったのである。⁶⁾

甘しょと並ぶ作付面積をもつ麦、裸麦および若干の小麦は三井楽町の例でも甘しょとともに作付の大半をしめるが、もともと五島では甘しょ—麦—甘しょ、あるいはこれに大豆、休閑をさしはさんだローテーションを中心とする主要な畑地利用方式によって栽培されてきたものである。麦は甘しょとともに五島の農家の主食としての役割をになってきたものであるが、甘しょが貨幣経済が侵透しつつある五島の農家の家計を支える最大の農産物商品となってきたこの時期にもまだまだ自給食糧としての役割を大きく残していた。敗戦直後にくらべれば麦類の出荷も伸びてきているが、甘しょに対しその販売はまだまだ少なく、米食率の低いこの地域での自給食糧その他、自家消費に向けられていたことをうかがわせる。⁷⁾

甘しょ販売額の多少はあれ、甘しょと麦の作付が畑作の大半をしめ、基幹作目となっているのがこの時期の三井楽町、五島のみならず、この海域はもちろん西日本各地の離島に広く見られる作目構成であるが、さらに五島、福江島にみられるようにこれらの耕作の使役のために和牛を組合せ、生産された仔牛を出荷し、現金その他を手に入れるのもまた古くからおこなわれた島の辺境的商品生産の形態であった。後にみられるようにこの時期の島牛の飼養目的はまだ農耕のための使役の意味が大きく、役利用および厩肥生産を第一の機能としており、その零細規模の飼養はおくれた生産構造に規制された自給的畜産の性格をまだ強くともめていた。しかし、福江島の農業が自給的農業生産の構造を強くともめながらも商品生産の方向へと大きく踏みこんでくるにつれて、甘しょ作の商業化の進展とともに、おくれた伝来的な生産、

出荷態勢を残していたかにみえる島牛の飼養の態勢もより大きく商業化の方向を打出そうとしていた。即ち、和牛の用途が使役から食肉への移行の動きが伝わってくるなかで、使役用の和牛仔牛の出荷がいまだ大勢をしめてはいたが、そのなかに肉用牛の素牛生産にとりくむ動きがみえ始め、出荷体制も畜協、畜産組合、そして農協、畜協を組織する畜連（五島畜産販売農業協同組合連合会）へと展開し、きわめて不十分ではあったが出荷体制は整備の方向を歩み始め、さらにまた県、市町村等の指導、援助とともに、これらの畜産組織も生産態勢の整備にもかかわり、出荷、生産体制整備への歩みがみえ始めていたのもこの頃であった。⁸⁾

みてきたような下五島地区の農業に対し、上五島の島々の農業の商品生産への歩みはきわめておぼつかないものであった。これらの島は古くから、藩政期にも、漁業、水産物の出荷、これらにたずさわる人々のかかわりをめぐって、商品、貨幣経済との接触はありえたとし、貨幣経済の洗礼はうけたであろうが、⁹⁾豊かな漁業資源に比べ、農業の基盤はあまりにも劣悪であり、ここでは商業的農業が育っていく条件はまず、殆んど、なかったといえよう。上五島の島々は、山林、急傾斜地が多く、耕地は今日でも、これら島面積の6.8%にすぎず、農家の耕地面積はきわめて零細狭少であり、まず、耕地条件が劣悪、生産基盤を殆んど全く欠いていたというしかなかった。昭和30年の上五島地区（奈留町、若松町、上五島町、新魚目町、有川町、奈良尾町）の農家の耕作規模は同年の臨時農業基本調査によれば0.3町未満が全農家の72.2%をしめ、それも要改良土地、しかも急傾斜地が甚だ多く、¹⁰⁾きわめて狭小な田畑が山腹、谷あいには散在している、というのが上五島農業の耕地条件であった。作付は、粗放な畑作物が殆んどであり、上五島地区の農業を典型的に示すとみなされる新魚目町の農業をとってみれば、¹¹⁾その昭和31年の作付でもっとも大きいのが甘しょ（299町）、次いで麦（200町）および野菜類等（88町）であり、これらの多くは自家消費にあてられ、出荷は僅かな切干甘しょなどがみられるぐらいである。即ち、この地区の切干甘しょの出荷とは、5俵～10俵程度を出荷する農家をもっとも多く、出荷量の大きい農家でも40俵～50俵程度であり、500俵以上のお荷量をもつ農家が少なからず見出される下五島、

福江島にくらべれば極めて零細といわねばならず、このような零細な切干しの出荷はせいぜい農協等からの僅かな生産資材の購入の支払いにみあうか、みあわないかの出荷額にすぎないであろう。このような農家の様相は上五島地区としては幾分なりとも水田面積の大きい上五島町、有川町においても変りはなく、それなりに微量の米の出荷もみられるが、僅かではあるが、もっとも主要な、むしろ唯一ともいえる商品化される農産物としての切干し甘しょの出荷は新魚目町の場合と同様であり、その他いくばくかの畜産物、和牛の出荷があるが、めばしい商品作物とてなく、下五島地区に比べ、さらにまた、耕地条件は劣悪であり、農機具の装備も“めばしいものはない”といわれる程、貧弱であり、農作業は主として老人、婦人の、しかも殆んど“人力”によって行なわれる農耕の生産性、収量はきわめて低く、食糧事情が好転し、“出稼ぎの収入がいい”と耕地が荒れてくるといわれる、また、野菜を作っても売るのが恥ずかしい”などという声も聞かれた上五島地区の農業は、漁業、出稼ぎ、山林労働その他の雇傭によって支えられる、食糧入手のためのきわめて自給的性格の強い農業といわねばならなかった。このような自給的性格の強い農業、農家はもちろん上五島のみではなく、下五島の零細農家の滞留する地区に随所にみい出されることはいうまでもない。零細な農家がきわめて多い漁村地区の切干し甘しょの販売、出荷の様相は上五島の場合と同様であり、周辺地区に規模の大きい畑作農家がある場合には、数百俵、ときには1,000俵近い切干し甘しょを出荷する農家のかたわらで数俵の切干ししか出荷しない農家の姿がみられることはいうまでもない。

上五島地区で切干し甘しょに次いで出荷額が大きいのは和牛仔牛であった。¹²⁾しかしその飼養形態は、まず飼養農家率が下五島地区は68%であったのに対し、上五島地区は20%にすぎず、飼養規模は1頭飼養が飼養農家数の49.2%、2頭飼養が28%、即ち1～2頭飼いが多く、その飼養目的は下五島が使役であり、そして生産であったのに対し、急傾斜の、狭少、零細な耕地が多い上五島では飼養目的は使役あるいは生産もあるが、育成の役割が大きく、いわば下五島の育成地帯としての位置をもつものであった。

もともと古くからの和牛の生産地帯であった五島列島は、昭和25年以降、

飼養頭数は減少或いは停滞気味であったが、昭和25年当時、年々3,000頭程度の仔牛が海を渡って本土へ出荷されており¹³⁾、その他、畜連の開設する各地区の市場を経由しない頭数、また、出荷頭数の把握が困難な成牛の出荷もあり、古くから和牛は島外、本土に販売されて、島外からの稼得、現金収入を五島の農家にもたらしてきた。五島の和牛の飼養目的はいうまでもなく、その重粘な土壌の耕作にあたっての使役であり、そして生れた仔牛が売却されてきたのであったが、肉用素牛としての用途にも振向けられるようになってくる。昭和35年頃は和牛の飼養目的は役より肉にむけられていた時期であるが、しかし五島では使役の意味がまだ大きく残されていた。この時期における五島の和牛の飼養目的は役利用が大きく¹⁴⁾、そして厩肥生産が重要であり、そのきわめて零細規模の飼養はおくれた農業生産構造に規制された自給的畜産という性格をまだ強くとどめていた。しかし、この時期には古くからおこなわれてきた和牛仔牛の商品化形態にはなお辺境の商品生産の性格をとどめつつも、前にふれたように出荷組織の整備の方向、改良への動きを見せ始め、商品生産的畜産展開への方向を打ち出そうとしていた。とはいえ育成地帯の性格をもつ上五島地区ではその飼養形態にも、また出荷形態にも、商人支配の強さ、市場外流通の姿態にもみられるように、その販売方法の不合理な形態が、下五島にくらべても、まだより多く見出され、辺境的な商品生産の性格をより強くとどめていたといえる。

上五島地区の農業に商業的農業の展開が殆んどみられず、自給農業の性格を強くとどめていたのは、まず何よりもその劣悪な耕地条件、市場条件によるであろうが、これに対し、下五島地区の農業は水田こそ少ないが広い畑地をもち、輸送条件は上五島にくらべればまだ恵まれた事情にあり、その恵まれた耕地条件の上になって商品化の進展とともに農業技術、労働生産性をひき上げてきており、粗放な作物の耕作に終始し、労働力の面からも商品生産的農業への発展を制約されながらも、自給作物であった食糧農産物の商品化によって商品生産農業の発展に対応していた。即ち、伝統的な自給的農業を基盤に、その延長線上にはあるが、自給的農業を可能にする範囲で商品生産農業への途を、その展開の途を歩み出そうとしていたということが出来よ

う。そのかぎり自給農業の臍帯をなおも身にとどめつつ、自給的農業の色彩をなお色濃くとどめながら、そのまゝ市場経済のなかにまきこまれ、商品生産農業発展の方向をめざしていたということが出来よう。

五島列島周辺の海域の島々の農業が、このような、とくに上五島地区にみられるような農業を営む島々がしばしばみられるなかで、同じくこの海域、長崎県の西の海に位置する島々のなかには、五島列島の場合とさほど変わらない耕地条件にありながら、商品生産的農業への志向、市場対応への姿勢についてきわめて積極的な態勢を示してきた島をみい出すことも出来る。また同時にそのような姿勢をとりながらも商品生産の展開がさほどめだたない島もみうけられる。上五島の北に位置し、歴史的、地理的にかつては、五島列島であった小値賀島、宇久島、そしてそこからや、北に位置するこの海域では数少ない水田の広い大型の農業の島、壱岐、これらの島々の商業的農業へのとりくみについて次にみて行くことにしたい。

B 小値賀島、宇久島そして壱岐島

小値賀島 1950年世界農林業センサスでは小値賀島は、その属島を含めて田 111.9 町、畑 650.1 町、農家戸数 1,116 戸の、外海におかれた小規模な離島であるが、その農業の作付も、敗戦間もない昭和25年では、もっとも大きいのは、主に主食用、自給用の麦類 (392.4町)、甘しょ (240.2町) であり、次に大豆 (116.5町)、水稻 (108.7町) がこれにつづき、粟 (51.9町) の作付もおこなわれ、そして、そら豆 (48.8町)、小豆 (27.3町)、すいか (25.2町) の順にならんでいる。食糧不足の敗戦直後という時期ではあるが、やはり粗放な、伝統的な、そして自給食糧としての作物が大部分をしめていたこと、栽培目的、形態に自給的農業の性格が色濃くまつわりついていたことはみてきた五島の場合とほぼ同様である。しかし、これらとともに統制、価格支持制度のもとにない、すいか等の野菜その他豆類等の市場の競争にもまれる作目が少面積とはいえ敗戦後間もない時期に、この島では栽培され、少なからず出荷されていた。

もともとこの島の商品作物へのとりくみはかなり古くからみられたが、小値賀島の商業的農業への足どりをあとづけてみると大正中期以降、桑園面積¹³⁾

がいちじるしく拡大し、この海域の島としては養蚕は特殊ともいえる普及がみられるのであるが、昭和5年の83町を頂点として桑園は激減し、昭和10年には早くも痕跡をとどめる程度となった。かわって、大正10年頃取入れられた輸出向け根およびすいかの栽培がさかんとなり、うち輸出向け根は養蚕が下火となった昭和8年には64町の作付となり、長崎県の島原半島の産地とともに全国的な主要産地となり、島外、国外に輸出されて現金収入をもたらしていた。しかし輸出向け根は大平洋戦争の開戦とともにアメリカ向けの輸出が杜絶え、すいかの作付は昭和12年には54.5町におよび小値賀すいかとして佐世保市場を中心に長崎、五島、福岡市場に出荷されていたが漸次、衰退し、とくに戦争とともに作付制限令によって栽培は縮小されることになる。とはいえ、これらは生産の統一と流通の共同化によって出荷体制の整備がはかられてきたものであり、また古くから小値賀牛として名があった和牛も早くから、明治40年には定期的な牛市が開設されており、離島としての不利な出荷条件の緩和をはかり、有利な販売体制をととのえ、商品的生産に踏みこもうとしてきた対応の姿勢はこの海域の離島としてはきわめてきわだっていた。このように商品作物を導入し、商業的農業にとりくもうとする姿勢が養われてきた背景には、豊かな水産物の出荷をめぐる商業、貨幣経済との深い接触が早くからみられた地区ではあったが、イワシ刺網を中心とする小資本家的漁業経営にたずさわった農家の商品、貨幣経済に対するとりくみにもみられるような商業的感覚があったことがうかがわれる。

昭和25年以降も、さとうきび、さらに再び、輸出向け根がとり入れられ、また葉たばこの導入、その他、抑制とまと、えんどう、みかん等、新たな商品作物を求めての歩みは続けられる。しかしこれら商品作物栽培の前には、まず、島のきびしい自然条件がたちはだかっている。島の水、干、風害などの苛酷な自然災害にいためつけられ、さらにはその地理的条件などからもたらされる劣悪な市場条件、そして激しい価格変動等にゆきぶられ、蓄積の乏しい農家の作付は程なく萎縮あるいは消滅して行く姿が多くみうけられるなかで、かえって島の自然条件を有利に生かして栽培が続けられる作目もあり、その様相は様々である。戦後に導入された作目のうち、さとうきび、

ゆり根は普及することなく姿を消し、昭和29年になるが導入された葉たばこは、またたく間に普及したものの、水、干、風害などの打撃をうけ、作付面積は縮少し、昭和31年頃を最盛期として栽培面積は凋落に向い、また、昭和30年頃導入されたみかんは頭初、ある程度、15ヘクタール程の植栽をみせたが、間もなく潮風害にみまわれ、全く成長の芽をつみとられてしまう。これに対し、抑制そさい類、とくにえんどうは、小値賀島の気候が冬期、比較的高温で夏作物の在園期間を延長する条件をもっていること、そこで島からの出荷輸送が高温時期を避けることになり、日持をよくし、したがって海上輸送の不利な条件を緩和していること、などが保温資材の開発、発達にも持ち堪え、その栽培が長くつづけられ、今日にもおよんでいる。即ち、島の自然条件、気象条件を有利に利用している事例であろう。

しかし、おおむね、島では新しい商品作目が導入されても、まず栽培にあたっては苛酷な自然条件にさいなまれ、出荷に際しては、とくに今日の島にとっての宿命的な条件、劣悪な出荷、輸送条件のもとにたつことを余儀なくされ、このような不利な条件が加味されることにより、商品作物栽培の消長は甚だしく、とくに自然災害による手痛い痛手をうけては島の農家の乏しい蓄積ではその痛手に耐えることはきわめて困難であり、また再び伝来的な作目、甘しょ、麦の栽培にもどってしまう。甘しょ、麦の作付は、いうまでもなく自給のためと同時に、出荷して貨幣を取得するためである。現金入手の途は、古くからの“出稼ぎの島”小値賀島の農家では島の農・漁業の不振とともにさらに出稼ぎへの傾斜を強めて行くことである。ともあれ、漁業、出稼ぎをめぐる商品貨幣経済とのかかわりをもってきたこの島の商品作目の導入、作目の選択、構成にはこの海域の島としてはそれなりに、ともかくも積極的な商品作目導入の意欲、商業的農業にとりくもうとする姿勢はみることが出来る。

宇久島 自給的性格がきわめて強いとされるこの海域の島の農業にも小値賀島のような商品生産的農業への指向を示す島もあることをみたが、なお小値賀島の農業の性格をみるとともに外海におかれた畑作主体の小規模な島の農業の本土市場へのお荷の事情をみるために、小値賀島とや、以かよった農

業生産の条件と商品化の動きを示すと思われる、隣接する宇久島の農業の敗戦後の商品生産のあゆみを小値賀の農業と対比してみることとしたい。

宇久島は1950年世界農林業センサスによれば田202.8町、畑750.5町、農家戸数1,239戸の島であるが、小値賀島より島の規模も田、畑もやゝ大きく、漁業への依存とともに、農業生産の比重が大きい、農業の島ともいえる外海の離島である。戦後の宇久島の農業の様相をみるために、まず1950年農林業センサスにより、昭和25年の作付を面積順に列举すると、麦類（383.9町）、甘しょ（378町）および大豆（315.1町）がほぼ同列に並び、それに水稻（192町）が最も主要な作目であり、これらから大きくはなれて、大根（18.7町）、かぼちゃ（10.7町）、小豆（10.5町）、そらまめ（9町）があり、またすいか（2.8町）、そば（1.4町）、粟（1.3町）なども僅かながら栽培されている。この作物構成を隣島の小値賀島と比べると麦、甘しょ、大豆、水稻までの順位は同じであり、これらの作物が作付の大部分をしめ、圧倒的に大きいこと、またこの時点では葉たばこの作付はいずれも導入されていないことも同様である。ただ宇久島は小値賀島より、そら豆、すいか、小豆などの作付が少ないことがめだっている。宇久島の作付はいずれにせよ、伝来的な、粗放な普通作、食糧農産物がきわめて大きな割合をしめ、自給的作物の栽培に終始しており、これらはこの海域の島々がそうであったように、自家食糧に向けられるとともに、販売されて若干の現金収入を農家にもたらしてきた。自給的性格をなお強くとどめる農業ではあったが、伝来的な、普通畑作物中心の商品化はおこなはれてはきている。しかし、この時期、宇久島では小値賀島に比べ、すいかなどの野菜のようなより市場競争にさらされることになる商品作物栽培の芽生えはきわめて小さかったといえよう。

宇久島、小値賀島の農業の商品生産への踏み込みの違いは、この海域の島々も“高度成長”の波に漸く洗われるようになる昭和35年頃になるとよりあきらかに見られるようになる。作付面積では、二つの島を比べてみると（表2）、耕地面積、とくに水田がより大きい宇久島が、甘しょ、麦、大豆などの伝来的な畑作物および水稻がいずれも小値賀島より大はばに大きいのに対し、商品化される野菜は、僅かな面積の、佐世保に駐留する占領軍向けの特種な

(表2) 昭和35年, 宇久, 小値賀作目別作付面積 (単位 ヘクタール)

	水稻	麦類	あわ	甘しょ	ばいれ	大豆	小豆	そら豆	なす	トマ	きゅう	かぼ	すいか	だい	たま	なたね	たばこ
宇久	211.5	489.1	0.1	498.4	3.2	183.9	6.1	1.7	1.3	4.0	3.6	3.0	11.2	25.4	5.3	4.9	19.4
小値賀	107.1	452.4	24.0	303.9	20.1	95.0	19.3	32.9	0.2	1.5	2.0	8.7	39.7	14.5	6.5	11.3	34.5

注「世界農林業センサス」による。

とまとを除いて、とくに主要な出荷野菜であるすいか、あるいはそら豆などは小値賀島が大はばに大きく、また大麦から切替えられたのもっとも大きい販売額をもつ裸麦に次いで大きく重要な商品作物である葉たばこもまた小値賀島¹⁶⁾がはるかに大きい。即ち、宇久島、小値賀島ともに普通作中心の農業であることに変わりはないが、宇久島がより普通作中心の商品化の途を歩んでいたのに対し、小値賀島はより激しい市場競争にさらされることになる野菜、あるいは当初から商品作物として出発している葉たばこ生産の展開が大きく、小値賀の農業が商品生産的農業の方向をよりさしせまっておいもとめていたことをうかがわせるものであろう。この背景としては、前にも述べたように小値賀島では豊かな水産物の島外出荷をめぐって、本土との往来は藩政期からさかんにおこなわれ、明治中期には小値賀は「上五島一円の商業の中心地」とみなされるように、商工業も盛んであったといわれること¹⁷⁾、そして農家にも小資本家的漁業を営むものがあり、また小値賀島の農家は藩政期、明治初期から捕鯨、稲刈り、炭坑、酒造業に働かれて出稼ぎとして本土に渡るものが多く¹⁸⁾、商品、貨幣経済との接触も早くからおこなわれ、なんらかの形態で漁業にもかかわる農家の間にも貨幣経済にたいする感覚が培われたであろうと思われること、そこで水産物の出荷態勢にもみられるように¹⁹⁾、既にふれた和牛生牛の出荷、野菜の出荷形態にも当時としては合理的な体制を組織するなど、市場対応の姿勢にもみるべきものがあつたことなどがあげられよう。これに対し宇久島も、小値賀島よりは小さいとはいえ豊かな漁業資源を持ち、藩政期にも宇久島、とくに神浦港を基地として本土の漁船も集まり、これにともない本土へ海産物を移出する商人、廻船業者もあらわれ、島外への荷を扱う商取引もおこなわれ、また明治に入ると島民の漁業出稼ぎもめだつたが、しかし明治も中頃以降、汽船の大型化にともない本土の漁船も基地

を移転するに至り、帆船時代には天然の良港であった神浦港の機能は低下し、漁業基地としての重要性はうすれ、これにともない島外との商取引も不振となっていき、やがて殆んど影をひそめようとしていたこと²⁰⁾、また小値賀島に比べれば耕地が広く、とくに藩政期からしばしば干拓にとりくみ²¹⁾、開田にはげんできた宇久島は離島としては広い水田をもち²²⁾、小値賀でもほぼ同様であるが階層分化もそれほどの進展をみないままに、甘しょ、麦、水稻そして和牛を組合わせる伝来的な普通作の自給的農業に極力専念してきた宇久島の農家は、自家食糧でも小値賀島に対しまだ恵まれており、食糧その他を手に入れるための貨幣を切実に求める、出稼ぎ先から米をもちかえる小値賀の農家に比べ、貨幣入手の切実性はまだ弱かったのではないと思われる。小値賀島に比べれば、貨幣、商品経済との接觸は薄く、侵透の度合がまだ浅かったと考えられる宇久島の農業は水産物のおくれた出荷態勢の事例にもうかがわれるように、農業生産においても、商品化にたいするきびしい姿勢をとることなく、殆んど普通作によりかかったまゝでの商品化の途をあゆんできたと考えられる。

それにしても小値賀島の場合にみられたと同様な“換金作物”，商品作物の出荷をもおこなったのは、侵透してくる貨幣、商品経済の波とともに、隣島、小値賀島の農業の商品生産化への動きにならい、歩調を合せるものであったし、農産物の本土への出荷はすでに藩政期にもおこなわれた水産物を出荷する和船の本土への航路によるものであったが、とくに明治初期以降、汽船による小値賀から早岐に至る航路、上五島から小値賀、宇久等の島々を経由し、早岐、佐世保あるいは長崎に至る航路を通じてであった。このような形態の農業の商業化への動きは、たとえささやかなものであるにしても、大正、昭和になるとこの周辺海域の若干の農地をそなえた数多くの島々に見出すことが出来るようになる。小値賀島、宇久島の場合はこのなかでや、規模が大きく、やゝめだった事例といえよう。貨幣、商品経済の侵透、農業の商業化の動きに誘われたものであり、整えられてくる航路にのせられたものであるが、しかしこのような小さな、分散された離島の商業的農業、商品生産経営が伸びていくことはここでも極めて困難である。これには、外洋におか

れた小さな離島の潮風等の自然条件、前にふれたように生産基盤、耕地条件の劣悪さ、そして技術の低位性とともに、まず何よりも島外、本土の市場への出荷に際しての輸送上の不利な条件、運賃の割高を始めとする輸送上の阻害事情がきわめて大きいことが、重要な理由となっていることはみやすいことであろう。

壱岐島 宇久島のように離島としてはやゝ耕地に恵まれている島では、とくに出荷輸送に困難がともない、市場での競争に不利な条件を負わされる農作物ではなく、米、麦あるいは甘しょ（切干し）のような普通作の、自給的農産物の商品化が、なんらかの形態でまずおこなわれるのは当然おこりうることであろう。いうまでもなく、何よりも出荷輸送上の支障が少なく（食管理体制の整備とともに今日では殆どなく）、市場への対応もそれなりに容易となってくるからであろうが、さらには伝来的に栽培されてきた自給的作物のみならず、貨幣、商品経済の波により深くまきこまれてくるにつれて、そして出荷輸送上また市場対応の条件が整えられてくるとともに、耕地単位あたりより多くの貨幣をもたらし葉たばこ等の換金作物の導入をこころみる。そしてさらに、より大きく現金収入を求めて作付に制約がある葉たばこ等の作目から出荷輸送上、市場対応に困難がともなう野菜等の園芸作目をもとり入れようと試みる。この海域では耕地面積の大きい、とくに水田の多い大型離島の壱岐の島をとりあげてみよう。

壱岐の島は1950年の農林業センサスによれば、水田1,660.3町、畑3,358.7町の耕地を6,049戸の農家が耕作する、小値賀島、宇久島に比べても島面積、耕地面積が格段に大きい、とくに島としては水田面積がきわめて大きい農業の島である。この壱岐の島でも、戦争が終って間もない昭和25年時点の作付を栽培面積順に列举すると、麦類（3,026.6町）、水稻（1,981.5町）、甘しょ（1,076.4町）および大豆（786.6町）が際だって大きく、これらに続いてあずき（179.7町）、なたね（176.4町）そして葉たばこ（192.2町）が並び、それこれらの耕作のための壱岐牛の飼養が組合されているのが壱岐の農業の姿であった。

このような壱岐の農業からの島外への出荷額で大きいのは、米、麦、甘しょ、さらに葉たばこおよび大豆等であり、そして耕作に付随する使役牛、壱

岐牛の仔牛であった。これらは統制、規制または固い価格支持をうける農産物であり、また大豆のように出荷輸送に支障の少ないもの、仔牛のように島の市場で販売されるものであり、葉たばこを除いて、いずれも旧来からの自給的な食糧農産物の出荷、販売であった。このような形態での農産物の島外出荷、商品化によって貨幣、商品経済に対応し、商業的農業に入りこんでいたのであるが、壱岐島の農業はおゝむね、まだまだ粗放な、自給的性格のきわめて強い、普通作主体の農業であったといわねばならない。この壱岐島の農業の態様、とくに自給的性格はこの島でも“高度成長”の波がおよんでくる昭和30年代に至ってもきわめて強く残されていた。

昭和35年の壱岐の作付を1960年世界農林業センサスにより面積順にあげると、麦類(2,304.8町)、いね(1,786.6町)が昭和25年当時と同じくもっとも大きいのはいうまでもないとして、この頃、輸入原料に押されようとしていた甘しょ(535.2町)が作付を半減し、これに対し昭和36年の輸入自由化以降、急減していく大豆は、その前年にあたる1960年時点では昭和25年に比べ作付面積を若干増加させ、順位を入れかえてそれぞれ4位、3位となっているが、これらの作付がとくに多く、作付面積の大半をしめることは昭和25年当時と同様である。これにつづいて大豆と同じくこの時期まで作付を伸ばした菜たね(494.7町)が大きく、ついで葉たばこ(340.1町)、やゝはなれて、あずき(177.7町)、だいこん(84.9町)と並んでいるが、作付の基本的傾向は前記の昭和25年の頃とそれほど変ってはいない。

離島としてはきわめて耕地の大きい壱岐では、生産物、とくに甘しょの自家食糧、飼料向けも大きい²⁶⁾が、米、麦(裸)あるいは大豆等の在来の粗放な食用農産物の商品化がまず大きく展開したことは首肯出来るが、いわゆる“換金作物”とされてきた作物、商品作物の伸びは葉たばこ等を除けばきわめて小さい。米、麦または葉たばこのような作物の商品化は大きい²⁶⁾が、いわば市場において自由競争的な立場にたたされる野菜類等の商品化の展開は小値賀島あるいは宇久島の場合に比べても小さい。野菜類としては比較的、作付が大きい島外、本土に出荷される作目は昭和35年、1960年農林業センサスによると、すいか(63.3ヘクタール)、にんにく(46.6ヘクタール)、ばれいしょ

（春，秋，28.8ヘクタール）があるが、その大きな耕地面積にしては分散された零細な栽培からの少量の出荷であり、その他の野菜のはくさい（27.3ヘクタール）きゅうり（14.4ヘクタール）あるいはいんげん、にんじん、ピーマン、かんらん等々のきわめて多くの品目の零細な栽培は殆んど島内消費にあてられるものであり、島外への出荷はきわめて少ないといわねばならない。²⁷⁾

ところで島外へ出荷される野菜であるにんにく、すいか、ばれいしょあるいはとまと等はどちらかといえば農協ないし任意の出荷組合による出荷が大きいように推定されているが、島の商人の手により、本土の市場と同時に海をへだてた対馬に出荷されるものもある。この島内の小売商、集出荷業者による離島の対馬、厳原の小売商への出荷はまた離島の野菜生産、出荷の事情を示すものでもある。野菜のすいか、ばれいしょ、とまと等は福岡市場などの業者からの“出荷奨励”、“要請”などにより作付られ、昭和33年、34年頃、とくに青年部等が中心となり、集落規模の研究会、栽培そして出荷組合が各地に組織され、これらの野菜栽培、出荷がおこなわれることになるが、零細層による作付が多く、栽培の規模も、その組織の規模も極めて小さい壱岐の野菜生産は、栽培技術も低く、出荷についても選別、包装等も不備であり、何よりも海上輸送による鮮度の低下は本土の大市場では低い評価を受けがちであり、このような市場への出荷より、野菜の乏しい離島、対馬への出荷が有利であり、またむしろ本土市場への出荷が出来ないような条件のもとでも、対馬市場への出荷は可能となる場合があるのである。しかし、このような壱岐の野菜の生産、出荷もきびしい自然条件、気象条件、そして激しい価格変動にゆさぶられれば、ここでも蓄積が乏しく、不利な出荷条件のもとにあり、抵抗力の弱い、離島壱岐の野菜生産、出荷は、小値賀島の場合と同じく、萎縮してしまうのは珍らしいことではなかった。

また同じく、にんにくも昭和33年頃から普及されたが、とくに輸出向け需要に支えられて、昭和35年には栽培面積も拡大し、出荷の多くは農協、経済連、全販連を通じて、一部は商人の手により、北九州地区を中心に九州各地域、また阪神地区から海外へと出荷されていた。しかし、これもほどなく気

象条件、とくに長雨にたゝられ、輸入品との競合も激しくなり、価格の低迷をきたすにおよんで、作付も伸びなやみ、栽培面積の減少のきざしもあらわれてくる。にんにくのように比較的、長期の海上輸送にも耐えうる農産物商品はまた輸入品との競合にもさらされることになる。

商品生産農業への対応、踏みこみの未熟さはその畜産の形態にもみられる。壱岐の家畜でもっとも普及し、大きな比重をもつのは和牛の飼養であり、そして仔牛の生産である。この時期、壱岐の乳牛の飼養は殆んどとるに足らず、鶏、豚の飼養も漸く、僅かに商品生産としての途を歩もうとしていたが、その展開はきわめて小さかった。²⁹⁾これに対し壱岐は古来、和牛の飼養がさかんであり、昭和35年頃は飼養頭数、飼養農家数も停滞気味ではあったが、和牛飼養の農家普及率はほぼ8割、飼養農家一戸あたりの飼養頭数は2頭、当時のこの地域ではきわめて大きい飼養頭数といわねばならない。しかし、その飼養、出荷の形態にはなお辺境的商品生産の性格がまだまだ根強くまつわりついていた。

和牛の飼養目的はここでも役から肉へと移行しようとしていた時期ではあったが、壱岐では耕地の重粘な土壌、分散度の大きさ、傾斜率の高さ、零細さなどにより耕作には動力によるよりも、もっぱら牛が利用され、使役日数はこの時期においてもきわめて大きく、³⁰⁾和牛の飼養は使役と厩肥採集の役割をまだまだ大きく残していた。島としては大きな耕地をもつ壱岐は飼養頭数は多かったが、しかし管理は粗放で、粗飼料の不足から、また使役の重視から、耕種部門との競合をさけて、市場への仔牛の“早出し”がおこなわれ、生産牛の自家育成“つなぎ牛”、あずかり牛、牛小作などもおこなわれ、それはまた資質の改良にも影響をおよぼすこともあり、そして生産率がきわめて低く、³¹⁾生産地帯が多い長崎県でも最も低い地域に属していた。仔牛の販売にあたっては、さきにふれたように“早出し”がおこなわれる上に、資質の改良は進まず、登録も少なく、“銘柄も五島牛などのように通っていない”、粗放な管理のもとにあった“みばえのしない”壱岐牛は、本土への輸送に際しての運賃の割高等の不利な条件を背負わされ、商人が固定化しやすく、本土の商人に強く支配される、不合理な取引形態が強く残される離島の市場で取

引されるのであり、成立する仔牛価格も長崎県の各地の市場のうちでも最も安い価格で引きとられている。³²⁾即ち、粗放な、伝来的な飼養慣行を強く残したまま生産手段の一部として、使役、厩肥採集のために、“耕種部門の生産力をたかめる”目的で耕種部門に付属して飼養されてきた和牛仔牛の商品化は非近代的な性格を強くとどめる市場を通じ、ときおりの僅かな現金収入をはかるという商品化であり、“商業的畜産”であるとしても辺境的商品生産の性格を強くとどめるものであった。

とはいえ、壱岐の農業も商業的農業であることはいうまでもない。しかしそれはしばしば述べてきたように米、麦、葉たばこ等、政策的支持、価格統制のもとにある、出荷の容易な作物の商品化であり、またこれら主作物の耕作のために飼養されてきた和牛仔牛の販売、即ち古くから行なわれてきた自給部分補充のための商品化の延長である。これらが島外へ出荷される農産物の大部分をしめ、市場競争にさらされる野菜などの商品作物の出荷、とくに島外出荷はきわめて僅かであり、その栽培も島の各地に点在するのみであってまとまった産地といえるものは殆んど育っていない。壱岐は島としては広い耕地に恵まれ、耕地条件、自然条件には若干の問題がないわけではないが、この時点としてはまず農業基盤をもつといえる耕地を与えられ、したかって野菜生産、産地を形成するに十分な耕地基盤をもちながら、野菜生産が育たなかった最も大きな理由の一つは、まず、何よりも出荷輸送条件、市場条件が劣悪であったことであろう。まず、農業生産は米、麦、甘しょ、あるいは葉たばこなど、出荷が容易な作目が大方をしめ、市場へ向けての生産技術、出荷技術は育たず、市場対応の姿勢ははぐくまれにくい。むしろ壱岐は島としてはまず恵まれた耕地をもっていたからこそ、漁業などの兼業に支えられながら、出荷にさしあたり問題のない、粗放な自給的性格をまつわりつかせた普通作を主体とした商業的農業を展開させることになったのであろうし出荷の困難な、市場競争にゆきぶられる新たな野菜等の商品作物を導入し、一時は展開させるによせ、これを執拗に固守することなく、長く定着させることはとくに困難であり、これらの生産は殆んど育たず、産地は形成されずまた米、麦、甘しょ等の普通作にかえてしまうことは理解出来よう。これ

に対し、小値賀島、あるいは宇久島の農業が、もちろん、米、麦、甘しょ等の自給的、伝来的作目の作付は多いが、島としては比較的瞭な、新たに導入された作目による商品生産農業を展開させたのは、むしろ耕地が狭少であったからこそ、前にあげた企業的漁業経営、酒造その他の出稼ぎ等への従事により培われた商品、貨幣経済への対応の姿勢に支えられ、積極的に商品作物を模索し、導入した商品作目の定着に努め、商品生産農業を展開したことにあろう。おおむね、自給的色彩を強くともめているといわれるこの海域の島の農業にも、一部の島には、部分的にせよ、積極的に市場への対応をはかり、商品生産農業を形成させた島をみるにせよ、この時期、即ち“高度成長”の波が漸く九州西辺の僻遠の島にも及ぼうとしていたこの時期では、五島、小値賀島、宇久島にもみられたように、伝統的な旧来の自給的農業を基盤に、その延長線上に商品生産農業展開への途を辿りつつあった島の農業ということが出来よう。しかし、むしろ、それだけにその商業的農業も自給的色彩をきわめて強くまつわりつかせた商業的農業であったということが出来よう。

注1) 五島からの島外、本土への出荷は藩政期から海産物あるいは林産物（とくに薪炭）などが殆んどであったが、古来、五島は博多から西九州を南下する帆船の航路にあたり、また藩政期には豊かな海の資源をもとめて本土から集まる漁業者の基地もあらわれ、これらの人々の食料をめぐるかわりも考えられる。明治以降、在来の農作物あるいは特産物を始めとして徐々に商品化が進んでくことは「長崎県統計書」によってもうかがわれ、またいうまでもなく、戦時とくにその末期から敗戦直後にかけては「供出」という形での出荷が多い。ここでは、商業的農業に深く入りこんでいこうとする、敗戦を是と見て戦後の「高度成長」期にいたるまでの商業化の様相をみることにしたい。

2) 除虫菊は大正末期、岡山県の瀬戸内地区の技術者にすゝめられ、三井楽町でも栽培するものがあり、これをみならってやゝ普及をみたが、栽培技術がともなわず、管理も粗放で品質低下をきたし、その後、輸入品におされ、価格の下落とともに作付も減少し、昭和15年には2.5町の作付があった除虫菊も、間もなく消滅している（三井楽町教育委員会「三井楽町郷土誌」昭和27年、91ページ）。

- 3) 葉たばこ作が導入されたのは明治44年のことであるが、栽培技術が低く、ほとんど中止され、本格的に栽培されるにいたるのは戦後になってからであり、昭和22年3.3町(耕作者122名)、同24年15.8町(同101名)、同25年39.9町(同244名)と急速に普及していった(前出「同書」90ページ)。
- 4) 拙稿「五島の農業」長崎大学離島総合学術調査団「五島列島総合学術調査報告書(一)」昭和33年、68ページ～69ページ。および時期は少しおくれるが「農政調査委員会、日本の農業64『離島の農業』1969年」22ページ～24ページ。即ち、下五島地区の10アールあたり収量は昭和35年～38年の平均で全国平均より高く、また10アールあたり労働時間も少なく、純収益も高い。
- 5) 昭和25年当時と同じく、甘しょの生産が最も大きく、昭和36年の主な農産物は米289俵、麦7,760俵、大豆867俵に対し、甘しょは切干し甘しょで21万3,590俵、澱粉すりこみ量1,700トンにのぼる(前出「三井楽町郷土誌」84ページおよび拙稿「五島における農、畜産物の流通上の問題」長崎県五島地域総合開発振興計画書 昭和38年186ページ、188ページ)。
- 6) 前出「五島における農畜産物の生産をめぐる流通上の問題」187ページ。
- 7) 1960年センサスによるが、米消費が5割未満の集落の割合は市町別では次の表イのようである。漁業への就労が多い、農業への依存が小さい、あるいは殆んど依存しない、即ち、漁業からの収入によって米を多く購入してきた玉の浦等の漁業地区、とくに上五島の奈良尾等の一部の地区、五島では水田に恵まれた地区、岐宿が米消費が多い(表ロ)。麦もしくは甘しょ、とくに麦の消費が多い(五島ではこの時期には「切干し甘しょを売って麦を買う」とされていた)ようにみられるが、食生活の慣行もあり、いちがいには云えないにせよ、食生活(米消費割合)の一応の傾向はうかがわれよう。

表イ

市町別	福江	富江	玉ノ浦	三井楽	岐宿	奈留	若松	上五島	新魚目	有川	奈良尾
米消費5割未満集落の割合	% 74	79	42	100	33	67	79	75	87	74	40

※ 「1960年世界農林業センサス」による。

- 8) 前出「五島における農・畜産物の生産をめぐる流通上の問題」和牛の項、188ページ～195ページ。
- 9) 上五島をめぐる漁場では、とくに近世以降、捕鯨、鮪大敷網漁業その他鰯網漁業が

盛んになり、上五島、中通島の有川、魚目地方などには本土各地からも出稼ぎ漁夫などが集まり、それとともに“旅船”、商人の訪れるものも多く、そして漁業を営み、また魚問屋、仲買人として財をなすものも少なからず現われ、また、廻船業を営むものもあり、鯨、鮪等の塩物、またこれらを絞って得られる油等の水産物を博多、大阪などへ移出し、帰途には島の必需品などを持返って、漁民、農民にも販売していた。上五島地区の農、漁民もこの水産業をめぐる業種にみずから従事する、あるいはやとわれるほか、直接、間接にかかわりをもち、商品、貨幣経済にひきこまれていった。西村次彦「五島魚目町郷土誌」昭和42年の近世以降参照。

- 10) 耕地の傾斜度は、水田、畑、樹園地平均で、15%以上の急傾斜地割合は上五島町64%、新魚目町86%、有川町44%、奈良尾町92%、とくに若松町96%に達する（吉田忠男「五島地域農業の規模と問題点」前出「五島地域総合開発振興計画」98ページ）。
- 11) 上五島地域、新魚目町および有川町については、前出拙稿「五島の農業」62ページ、70～72ページによっている。
- 12) この項については前出拙稿「五島における農畜産物の生産をめぐる流通上の問題」188ページ～195ページの「和牛」の項による。
- 13) 五島の和牛の飼養頭数は昭和25年で下五島9,673頭、上五島、2,601頭であるが昭和30年になると下五島、7,106頭、上五島、1,570頭と減少している。生れた仔牛は昭和37年、5,017頭、うち島外に出荷されたのは3,083頭とされるが、この出荷頭数は島外の商人、農協の購入頭数より算出したものであり、島内の家畜商で島外、本土の商人（または農協）の下買または仲買的な立場にたち、したがって購入した仔牛は本土に向けて移出する商人も多く、またとくに上五島地域に多い市場での本人買あるいは評価をうけた仔牛のなかにも、全く市場に出されないで商人の手を通じて本土に出荷される仔牛もあり、5,000頭前後の仔牛生産があれば、常時3,000頭以上の仔牛が島外に出荷されたとみなされる（各年次世界農林業センサス、長崎県畜産課資料および前出「五島における農・畜産物の生産をめぐる流通上の問題」192・193ページによる）。
- 14) 長崎県畜産課によれば、昭和29年当時においては五島の和牛の飼養目的は殆んどが“農耕生産”であり、その後、動力耕転機の導入がいちじるしく進んだ昭和38年～41年にいたっても水田、畑とも五島では農耕への和牛の使役が広く残されており、重要な飼養目的となっている（長崎県総合農林試験場経営部（月川雅夫稿）「離島における

繁殖肉用牛複合経営方式の確立に関する研究」昭和51年、34ページ～36ページによる）。

- 15) 小値賀町郷土誌篇纂委員会「小値賀町郷土誌」昭和53年、271ページ～273ページ、289ページおよび月川雅夫「小値賀の農業―出稼ぎの島」前出「離島の農業」81ページ。

小値賀島のこの項は同書および同稿による。

- 16) 出荷額は昭和35年ですいか416万3,000円、そら豆112万4,000円、裸麦1,537万3,000円、葉たばこ1,346万9,000円（「小値賀町統計書」）。

- 17) 前出「小値賀町郷土誌」371ページ。

- 18) 「同書」271ページおよび531ページ～533ページ。

- 19) 「同書」313ページおよび361ページ～363ページ、鮑漁の出荷の事例をあげるが、鮑漁に従事するのは多くは農家であり、鮑、乾鮑は小値賀島の水産物でも島外、国外に出荷され、きわめて大きな稼得をもたらす重要な商品であった。

- 20) 宇久町郷土誌篇纂委員会「宇久町郷土誌」昭和40年、27ページ。

- 21) 1960年農林業センサスでは、経営耕地面積は小値賀島が751.9町（1戸あたり6.99反）なのに対し、宇久島は983.8町（同、8.91反）である。なお、水田率は小値賀島が15.2%であるのに対し、宇久島は21.6%である。

- 22) 前出「宇久町郷土誌」203ページ～206ページ。

- 23) 水田は1950年センサスでは宇久島は202.8町、1戸あたり1.7反であり、これにたいし小値賀島は水田111.9町、1戸あたり0.9反である。

- 24) 宇久島の小作地率は昭和20年で19.1%、これに対し小値賀島は16.2%（長崎県農地改革史編纂委員会「長崎県農地改革史」昭和28年172ページ）、経営耕地面積広狭別を農地改革が一段落した1950年農林業センサスによってみると次の表口のようなのである。宇久

表口 経営耕地面積広狭別農家構成比（%）

	～ 3 反	3反～5反	5反～1町	1町～1.5町	1.5町～2町	2町～3町
宇久島	20.2	13.7	34.2	24.0	6.6	1.3
小値賀島	28.4	12.9	36.6	18.3	3.3	0.5

※ 「1950年農林業センサス」による。

島、また小値賀島でもほぼ同様であるが、漁業への従事との関連、また農地所有についても漁業との関連がみられ、離島の農業にはしばしばみられるように3反未満の農家は多いが、1.5町以上層も少なく、ほぼ1町前後に集中し、経営面積では離島として

も階層分化はそれほど進んではないといえよう。

25) 鮑漁は宇久島にとっても重要な貨幣獲得源であったが、この販売体制のおくれについては前出「宇久町郷土誌」230ページ～231ページをみられたい。

26) 長崎農林水産統計事務所の推計によれば水田が多い壱岐では米、あるいは大豆の販売は大きいが、

表ハ 壱岐島主要普通作物の処分割合 (%)

この海域の農業の島にしては甘しょの販売は16% (五島は62%) に

	甘しょ	小麦	裸麦	大豆	水稻
自家食糧	48	88	70	59	63
自家飼料	36	7	8	12	—
販 売 量	16	5	22	29	37

※ 「長崎農林水産統計年報 昭和35年」による。

過ぎず、また小麦、裸麦はそれぞれ5%、22%でありいずれにしても自家食糧、自家飼料向けも大きい (表ハ)。

27) 拙稿「離島の農業と構造改善事業」長崎大学調査団「壱岐の経済」1964年、252 ページ～253ページ。

28) 「同上」252ページ～253ページ、また243ページをみられたい。

29) 「同上」236ページ～237ページ、254ページ～255ページ。

30) 「同上」238ページ、また、「長崎農林水産統計年報」昭和35年によれば耕起の動力利用面積は田畑計で4%にすぎず、殆んど畜力に依存し、その他、畑の中耕除草、いも堀取などにも殆んど畜力によっている。

31) 長崎県畜産課資料によると昭和35年で壱岐の生産率は29.6%にすぎない。その後、逐年、生産率は上るが昭和38年でも51.6%にとどまる。

32) 前出「離島の農業と構造改善事業」259ページ。

むすび

僻遠の、九州西辺の波荒い外海におかれた幾つかの島をとって、その農業の変貌、戦前の自給的農業から戦後の「高度成長」にさしかかろうとするまでの時期の商品生産にふみこんで行く島の農業の変貌を島から本土へ移出される作物の作付、出荷形態をめぐってみてきた。資本主義の発展にいよいよ深く包摂されて行く島の農業の一側面であるが、島の農業の商業的農業への

入りこみ、商品生産農業展開の様相はいうまでもなく島によって異なっている。商品生産農業の展開を妨げる要因は種々あるが、島にとって最大の、そして特徴的なのは市場条件の劣悪さ、とくに本土出荷にあたっての輸送条件であろう。それが島としては、農産物商品によって異なるにせよ、比較的有利か、あるいは不利か、その度合が商業的農業の展開に作用するわけであるが、しかしその前に重要な条件として耕地条件或いは自然条件がある。対馬あるいは上五島の中通島のような大型の離島であっても山島的地形の島では耕地は狭少であり、傾斜度は高く、基盤整備が殆んどはかられてこなかった離島では、一筆あたりの圃場もいきおい狭少、零細なものになりがちである。まして平坦地の少ない、耕地に恵まれない小規模の離島ではこれがより甚だしく、作目にもよるが、ときには、全く経営基盤を欠くことになる。さらに離島の一般的傾向として水が乏しく、自然条件とくに風、水、干害などにみまわれやすいという好ましからざる条件をもっている。

ところで、それほど耕地条件に恵まれていないにもかかわらず、小値賀島などのように市場での競争に激しくさらされる野菜などの商品作目を導入し、や、長期にわたりその展開をなしとげている島もみられる一方、広い耕地をもちながら、殆んど専ら、政策的支持のもとにあり、出荷の容易な米、麦、甘しょ等の伝来的な普通作そして和牛飼養あるいは葉たばこ等を最重点に商業化を遂げてきた島もあり、対照的である。耕地に恵まれないからこそ野菜等の新たな商品作目を模索し、導入し、これを固守してきたという場合もあろうが、その他に社会的要因も考えられよう。離島の農業をみるには漁業あるいは林業、出稼ぎ等とのかかわりを考慮しなければならないと同時に、農家の農業生産、出荷に対する市場対応の姿勢あるいは商業的もしくは経営的感覚をもみなければならないのではないかと考えられる。市場対応の姿勢はごくまれる背景には貨幣、商品経済とのふれあいであろうし、これを通じて商品としての農産物の生産、出荷の姿勢が育てられていくのであろうが、僅かながら、その足どりを小値賀島の場合などにみる事が出来る。

とはいえ、ある程度の市場対応の姿勢が育とうとしていたにせよ、多くの小型離島にみられるように、作目にもよるが、航路を通ずる他の離島の生産、

出荷との連携がおこなわれないならば、市場競争にさらされる商品的作物による商業的農業の展開はきわめて困難であった。何よりも島の農業の市場対応の姿勢を身につけるには、商品、貨幣経済、市場競争にさらされることが肝要であろうが、政策的支持をうけ、出荷の容易な作目に安住してきたかぎり、市場対応の姿勢、商品生産的農業の態勢をととのえるのは困難であつたろう。下五島、福江島あるいは壱岐島などにこのような島の農業の様相をみたが、小値賀島あるいは宇久島も麦、甘しょ、或いは稲などの伝来的な普通作そして和牛飼養に大きく依存していたのであり、いずれにせよ、この海域の島の農業は大なり小なり、伝来的な自給的な粗放な普通作に立脚し、そのような生産構造を維持し、一応の商業的農業を展開させたにせよ、そのような農業構造の上になつていたのであり、そのかぎり、まだまだ自給的農業の性格を多分にとどめていたということが出来よう。